

ヨーゼフ・ホフマンによる1900年代の建築作品 および関連文献資料の現地調査

酒井 彩乃

美学美術史学専門 前期課程1年

はじめに・調査と研究の概要

報告者は「ヨーゼフ・ホフマンによる1900年代の建築作品および関連文献資料の現地調査」をテーマに、平成19年8月26日から9月6日にかけて、ウィーン（オーストリア）、ブリュッセル（ベルギー）にて調査を行った。

今回の調査の主な目的は、建築家ヨーゼフ・ホフマンが1900年から1910年の期間にウィーンとその近郊にデザインした作品のうち《ブルカースドルフのサナトリウム》を中心に現存するもの、およびブリュッセルに建てられた《ストックレー邸》の見学と写真撮影、およびオーストリア国立図書館をはじめとする図書館や美術館等における文献の収集であった。

報告者は修士論文において《壁と窓を通して読み解くホフマンと「近代建築」の関係性について》をテーマに、ヨーゼフ・ホフマンの作品を扱うことを計画している。特にその中でも、彼の代表作とされている《ブルカースドルフのサナトリウム》（以下《サナトリウム》）、《ストックレー邸》に注目したいと考えている。

「近代建築」の歴史において、ホフマンは1950年代に「モダン・デザインのパイオニア」の一人として言及され、その代表作である《サナトリウム》と《ストックレー邸》を比較すると、白く平坦な壁体による厳格な幾何学的構成をもつ《サナトリウム》は、「街角の宝石箱」とも呼ばれる優雅で繊細なたたずまいをもち、贅をこらして作り上げられた《ストックレー邸》よりも「近代建築」により接近しているとの見解が、いわば通説のようにみなされてきた。

また、ホフマン個人の作品については、初期から晩年にいたるまでの作品を時系列的に紹介するものやホフマンの建築やインテリア、日用品、服飾品などの広範な活動を概観する研究はなされているものの、個別の作品を深く考察する研究は決して十分とはいえない状況である。そして近代建築史の研究においては1920～30年代に成立したとされる、いわゆる「近代

建築」にいたる発展段階に彼の作品を組み込むという形の位置づけがなされがちであり、伝統的な建築との関係性が比較的軽視される傾向にあった。

学部卒業論文においては上記の問題を指摘し、近代建築史におけるホフマンの位置づけに対する疑問を提示した。修士論文の作成に向けて、今後の研究ではとくに壁体と窓がどのように扱われているかに注目し、報告者が「近代」と「近代以前」の転換を示す手がかりとなると考えている「内部・外部」の相互関係がホフマンによってどのように表現されているかをみていきたい。また、ここでは、建築史の文脈を自明のものとしてせず、あくまで各作品の形態の詳細な観察と分析に基盤をおいた研究を行おうと考えている。

近年、従来の研究から離れ、彼をふくめた「近代建築」の初期の作例とされている作品を分析し、近代建築史のなかで再び位置づけを行おうとこころみる研究者も現れているが、ホフマン個人の作品に焦点を置いた研究、とりわけ近代以前の建築との関連は考察が進んでいない状況であるといえる。

よって、報告者は固有の形態がもつ視覚的効果の観察から建築史の流れへと視野を広げていく手法をとることで、ホフマン作品に対する一つの新解釈を提示することができると考えている。

調査報告

(1) ホーエ・ヴェルテの丘の住宅群 (ウィーン19区, 1900～07年)

ウィーン市北部の住宅街に建設された、芸術家たちを主とした家族たちのための個人邸宅群である。ホフマンはここで、ウィーンに固有の住宅形式『郷土様式』(Heimatstil)の模索をおこなった。主な依頼者は分離派のメンバーであった芸術家を中心とした文化人たちであり、施主との綿密な打ち合わせを通してそれぞれの邸宅に独自の構成を提案した。外観は、一人の建築家が同時期に手がけたものとは思えないほどその表現が幅広く、いくつかの時代や土地を感じさせるも



モル／モザー邸



シュピッツァー邸

のとなっている。特にイギリスのハーフティンバーを用いた民家に似た形態が特徴的であり、これは1900年の第8回分離派展で目にしたアーツ・アンド・クラフツ運動の作品や1902年に赴いたイギリスで訪れたC.R. アシュビーの〈ギルド・オブ・ハンディクラフト〉から受けた強い印象が影響していると考えられる。ここでは、現存しているものについてのみ述べる。

① モル／モザー邸 (1900～01年)

画家のカール・モルとデザイナーのコロマン・モザーそれぞれの家族のための住宅を一つにしたもので、そのためか他のホフマンの住宅作品と比べて複雑な構成となっている。ピラミッド型の角錐や大小の直方体、円筒などの積み木を組み立てて作った家のようなものである。薄茶の粗い漆喰塗りの外壁に強い青の彩色をされたハーフティンバーが非常に強い視覚的アクセントとなっている。これはイギリスの民家を思わせるが、格子状に組まれ窓をも包み込むハーフティンバーは、端の部分から剥がして取れるシールのようなものである。ただし壁面はそれぞれが独立したものではなく、あくまで立体のひとつの「面」にとどまっている。

② シュピッツァー邸 (1901～02年)

報告者が訪問した際、写真のように外壁に蔦が茂った状態で壁面がどのようになっているのかはあまりよく観察することができなかった。

資料によれば、2階部分より上にはハーフティンバーが引用として、つまり意匠としてもちいられているという。また、2階部分に見られる、細かな格子状に分割された窓が特徴的である。この窓には奥行きがほとんどない。まるで表面の一部をなすタイルの装飾であるかのようなものである。

③ アスト邸 (1909～11年)

古典的な三層構成の住宅で、最も下の層は石組み、



アスト邸

中間部分は縦長の窓と縦方向に溝をつけたなめらかな壁面が交互に現れている。最上部は水平方向に溝がつけられている。

壁面は全体に同じトーンの色合いで、イタリアのルネッサンス様式の住宅に倣ったかのような形態は、この住宅群の前半期に制作された作品には見られなかった特徴である。デザインが開始された時期としては《サナトリウム》と《ストックレー邸》よりも後の作品となり、形態上の共通点も多いので、比較・検討の際この作品を加えるのは有効であろうと考えられる。

④ モルⅡ邸 (1906～07年)

数回の改築を経ているため、この住宅に関してはホフマンが意図して制作したことがはっきりしている部分についてのみ述べる。

軒先と窓を囲む長方形の格子模様の装飾帯は当初デザインされたものであり、ホフマンの幾何学的なモチーフに対する好みはこの時期にすでに確立されていたということ、とりわけ格子模様の装飾帯の使用が彼の作品において定着したということを確認する。また、窓の分割やその形態は《シュピッツァー邸》や《サナトリウム》のそれとよく似通っており、ここで



モルII邸

も彼の窓における一つの傾向がはっきりあらわれているといえるだろう。

全体の形態は決して「近代建築」的なものではなく、むしろ洗練された民家調とでもいえるような姿である。これは主としてピラミッド型の屋根からもたらされるイメージであるが、ホフマンの当初の計画ではこの部分はドーム型にする予定だったようで、予定通り施工された場合現存する作品と印象はかなり異なっていただろう。

(2) プルカースドルフのサナトリウム

(プルカースドルフ, 1903~05年)

実業家ヴィクトル・ツッカーカンドルに再建を依頼された冷泉療養施設。都市生活のストレスに苦しむ、ウィーンの中・上流階級の人々のための、運動療法や水浴を通して精神的な安らぎを取り戻すための施設である。ホフマンが設計を担当し、インテリアはホフマンとその協働者であったコロマン・モザーが手がけた。第二次世界大戦後荒廃の途をたどったが、2003年5月に修復が完了し、現在は老人ホームとして利用されている。



プルカースドルフのサナトリウム

西正面・東正面とも、白と薄茶の漆喰塗りが施されたファサードに、白く細い棒材で分割された窓が整然と並んでいる。東側では玄関の扉、西側では階段室の垂直に連続した窓を中心に左右相称の配置が為されており、建物全体の、いくつかの直方体を組み合わせたような形態との相乗効果もあって非常に厳格で古典的な印象を観る者に与える。

またこの建物では、壁と壁の接する部分や窓枠の周囲が青と白のタイルで作った格子模様の帯で縁取られ、各面の幾何学的な形態を印象付けるとともに「面」として独立しているかのように見せている。装飾的要素はこのタイルの帯と玄関脇の一对の浅浮彫りといったごくわずかな量に抑えられ、この装飾的要素の少ない平面的な壁体や明快に幾何学的な形態が、「近代建築」に先駆けていると判断されるのはごく自然なことのようにも感じられる。

ただし、頂部の庇のような張り出し部分によって水平方向への視線の誘導が行われ、上からの統一感、あるいは蓋をして押さえつけるような印象も与えられている。この張り出し部分を「コーニスの残滓」と呼ぶむきもあるが、実際この突出は建物全体を古典的なものに見せるのに貢献しているといえるだろう。

(3) ストックレー邸 (ブリュッセル, 1905~11年)

上述のホーエ・ヴェルテの住宅群を気に入ったベルギーの実業家アドルフ・ストックレーがホフマンとウィーン工房に依頼した夫妻と子供たちのための邸宅。無制限の工費、夫妻の工房に対する理解に支えられて建設されたこの邸宅は、〈パレ・ストックレー〉とも呼ばれ、「宮殿」というその呼び名のとおり大理石張りの優雅で繊細な外装と細部まで徹底された工芸的な仕上げによる内装が特徴である。

白い大理石を隙間なく貼り合わせた、平坦でなめら



ストックレー邸

かな壁面同士の接線や窓の周囲を、縄目のような文様をつけ、金色に鍍金した装飾帯が縁取っている。この装飾帯は頂上に月桂樹の透かし彫りをした球体と四体の男性像を戴く階段塔（今回は修復中であったため、完全な形で観察することができなかった）から流れるように建物をめぐらされている。

この縁取りによって、建物は「山折り・谷折り」の目印がつけられた型紙を切り抜いて組み立てた紙細工のように見える。窓はこの時期のホフマンの作例と共通する、白く細い棒材で分割されたものである。

また、全体の形態としては中心軸を目立たせず、水平・垂直の突出部分が軽やかな皮膜感をそなえた壁体とともに、一つ一つの面に分解されて空中に解け散っていくかのような不安定な印象を与える。ファサードの一部は広い道路に面しているが、その壁が道路に向かって倒れていくかのような視覚的錯覚を引き起こす。

(4) ヴェルクブンド・ジードルンクの住宅 (ウィーン13区, 1930~32年)

ホフマンが中心人物となって1912年に設立され、素材・形態においてユーゲントシュティルが要求した水準に対応する質の高い芸術・建築作品の制作を促進し、またその高い水準を工業生産された品物にも適用されうるものにするために活動したオーストリア工作連盟は、1930年代に入って国際的に活躍する建築家たちを招いてウィーン郊外に住宅展示場を制作した。ホフマン、アドルフ・ロースのほか、ドイツ、アメリカ、オランダなどから建築家たちが集い、小家族向けの最小限住宅レベルのテラスハウスを中心とした制作を行った。

ホフマンによる住宅は当時の「国際様式」に共通する、白一色のファサードと幾何学的な形態の連続住宅である。一見、最新の「近代建築」であるかのように見えるし、実際この住宅はホフマンの制作した作品のなかでもっとも「近代様式」に接近したものであるとされている。《ストックレー邸》と同様階段塔部分を垂直方向に突出させ、単調になりがちなファサードに強いリズムを与えているが、その窓は《ストックレー邸》におけるよりもさらに拡大し、塔部分のほぼ全面を覆っているということができる。ここでも、白い棒材によって窓の分割が行われており、どこか工芸的で優雅な印象を与えるが、この窓と周囲の壁部分との高低差と格子状の分割が、グロピウスやミースといったホフマンの次の世代のカーテンウォールとは明らか



ヴェルクブンド・ジードルンクの住宅

に異なる、ある種の「古さ」のようなものを感じさせる原因にもなっている。

ホフマン以外の建築家による作品としては、彼の師であったオットー・ワグナーによる《郵便貯金局》(1904~06年)、ホフマンと同年生まれで同じくワグナーに師事したアドルフ・ロースによる《ロース・ハウス》(1911年)、ホフマンの先輩にあたるJ.M. オルブリヒによる《分離派館》(1897~98年)などを見学した。

また、ウィーンにおいてはオーストリア国立図書館、オーストリア応用工芸美術館、ウィーン建築センターにて、ブリュッセルではパレ・デ・ボザールにて資料収集を行い、《サナトリウム》に関する雑誌記事や2003年に完了した修復・再建についての新聞記事、ウィーン工房に関する最新の展覧会の図録の複写などを得ることができた。また、オーストリア応用工芸美術館においては、同時期にチェコ・ブルトニツェの分館で開催されていたホフマンとロースの素描展に関する資料を、パレ・デ・ボザールでは昨年《ストックレー邸》を中心テーマに据えて開催されたウィーン工房展の図録を得るとともに、展示会場担当者であった方に展覧会場の様子をうかがうことができた。申し出に快く応えてくださった各施設のスタッフの方々に、この場を借りてお礼を申し上げたい。

考 察

ここでは、今回の調査で観察したホフマン作品の窓と壁の表現について述べたい。

① 窓の分割について

ホフマン作品、少なくとも報告者が修士論文で扱う1900年代に制作された作品の窓は、しばしば細く、白色に塗られた棒材によって分割されている。基本的

には直線を組み合わせ、一枚の窓を大小の長方形や正方形に整然と区切る手法がとられているが、時に菱形や楕円、四分円などの要素（あくまで幾何学的形態に限られているが）も登場する。

このような窓の分割のしかたは、透過性という点で独自の役割を果たす。特にファサードにおいていえることだが、白い壁面に作られた開口を一枚のガラスを用いて窓にした場合、その開口が比較的小さな、狭いものであればあるほど、壁に穿たれた「穴」としての印象が強まり、壁体の実在と不在の対照が際立つ（黒など暗い色の棒材で分割を行った場合も、この状態に比較的近い効果が得られる）。また、従来の西洋建築の形態を踏襲した縦長の小さな窓に分割を行わない一枚のガラスを用いると、壁体の素材などとは関係なく視覚的にはいっそう、重量感のある壁体とそこに開けられた穴としての窓を強く想起するものになる。

一方、ホフマンが用いた分割の手法による窓は、それがたとえ旧来の建築を思わせる縦長のものであっても、壁体の存在と不在を功妙に結びつける役割を果たしている。この透過性によって、白く平坦な壁体を開けられた窓は、壁の不在をことさらに主張することなく、そこに存在することができるのである。

のちに近代建築の作家たちは窓の分割には黒や落ち着いた暗色が適すと考えるように至ったようだが、それには前提とする窓の形態がホフマンの用いた縦長のそれではなく、横長の連続水平窓や壁の前面をガラス張りにしたカーテンウォール、つまりその形態自体が旧来の重い耐力壁というものを否定するものであったということを考慮にいれなくてはならない。そして、《サナトリウム》の準備素描において水平連続窓を構想していたホフマンがどのような色で窓枠を彩色しようと考えていたかを明らかにする資料を、報告者は現在のところ得ていない。

また、ホフマンの作例の中でもっとも「近代建築」に接近した様式で制作されている《ヴェルクブンド・ジードルンクの住宅》においても、ホフマンは縦長の窓を白い棒材によって分割するという、1900年代と同様の手法を継続して用いていることがわかる。この点からも、「近代建築」の形態との表面的な類似のなかにある相違点をよみとることができるだろう。

② 壁の装飾・構成について

《サナトリウム》と《ストックレー邸》で見られる、壁と壁の接触部分を装飾帯で縁取る手法は、ホーエ・ヴェルテの丘の住宅群においては登場していないが、モルII邸においては軒部分と窓の周囲に《サナトリウ

ム》に類似した装飾が見られる。この住宅群は、ホフマンがウィーン工房を立ち上げ、《サナトリウム》の制作に携わった時期を挟んで、前期（1900～02年）と後期（1905～11年）に分けられるが、モルII邸は後期の作例に属し、この時点で壁面や窓の周囲を囲む装飾帯はすでにホフマンの表現手法の一つとなっていたと考えられる。よって、現在確認できる作例において、外壁に装飾帯が用いられた最も早いものが《サナトリウム》であると考えられる。

しかし、壁面を正方形や長方形の幾何学的モチーフで帯状に装飾する手法それ自体は、モル/モザー邸ホールや第14回分離派展会場などの室内装飾に、すでにあらわれていた。ただしここであらわれた帯状装飾は壁と壁あるいは天井の接触部分から離れた位置に配されていることに留意せねばならない。内装にこうした装飾帯が用いられた場合、《サナトリウム》や《ストックレー邸》のような境界の明確な画定の作用はさほど大きなものではないと考えられる。つまり、《サナトリウム》に見られる厳格な印象も、《ストックレー邸》に見られる壁が解体していくかのような印象も、内装においてはあらわれていないのである。また、モザーによる銀製の箱をはじめとしたウィーン工房の工芸品にも、面と面の境界を帯状の装飾文様で縁取ったものが見られる。こうした工芸品と建築の形態の類似も考慮に入れなければならないだろう。

さらに今回の調査で報告者は《サナトリウム》の玄関ホールと《郵便貯金局》の玄関ホールを観察・比較し、その壁面装飾が酷似していることを発見した。白い壁面に黒にごく近い紺色を用いて正方形や長方形が構成された装飾帯であるが、この二作品がほぼ同時期にデザイン・建設されたこと、ワグナーとホフマンが非常に近い間柄の師弟だったことを考えると、二人はモチーフを共有していた、あるいはどちらかが用いたモチーフに他方が影響され、相互作用的に発展させていったという可能性も十分に考えられる。ホフマンと比較するとワグナーに関しての資料は充実しているため、ワグナーの側からこの問題を考察することも有効であろう。

おわりに・今後の課題

今回の調査は、報告者が今後修士論文を作成するにあたって考察の基盤となる写真資料やホフマン作品への言及を掲載した当時の雑誌の複写を得るなどの、いわば足場づくりのようなものであった。

先にも触れたが、ホフマンは《サナトリウム》の構想段階で何度かファサードの変更を行っている。また、《サナトリウム》ほどの大きな変更ではないが、《ストックレー邸》にも数種類の準備素描が存在し、窓や壁の表現にもいくつかの変更が加えられている。

このことから、ホフマンによる準備素描を入手して時系列的に並べ、ホフマンが窓の配置や形態をどのように計画していったかを考えていきたい。また同時に、壁面の縁取りの計画にも数回変更が加えられているようなので、それについても考察したい。日記などの手稿や講演原稿のごく一部しか入手されておらず、現在どの程度の量の資料が残されているかさえ明確に

なっていない現状においては、資料収集と並行してこのような作業を行い、ホフマンの意図をさぐることが不可欠であると考えられる。

そこで、今後はホフマン本人による記述や講演のみならず、《サナトリウム》《ストックレー邸》を制作した当時のホフマンとウィーン工房をとりまく社会の趨勢や芸術・工芸に関する言説、とくに生活と生活の場としての建築をとりあげたものをひろいあげてゆきたい。今回の調査では雑誌に掲載された記事を取りあげることしかできなかったため、新聞記事やホフマンによる手紙なども可能な限り探してみようと思っている。